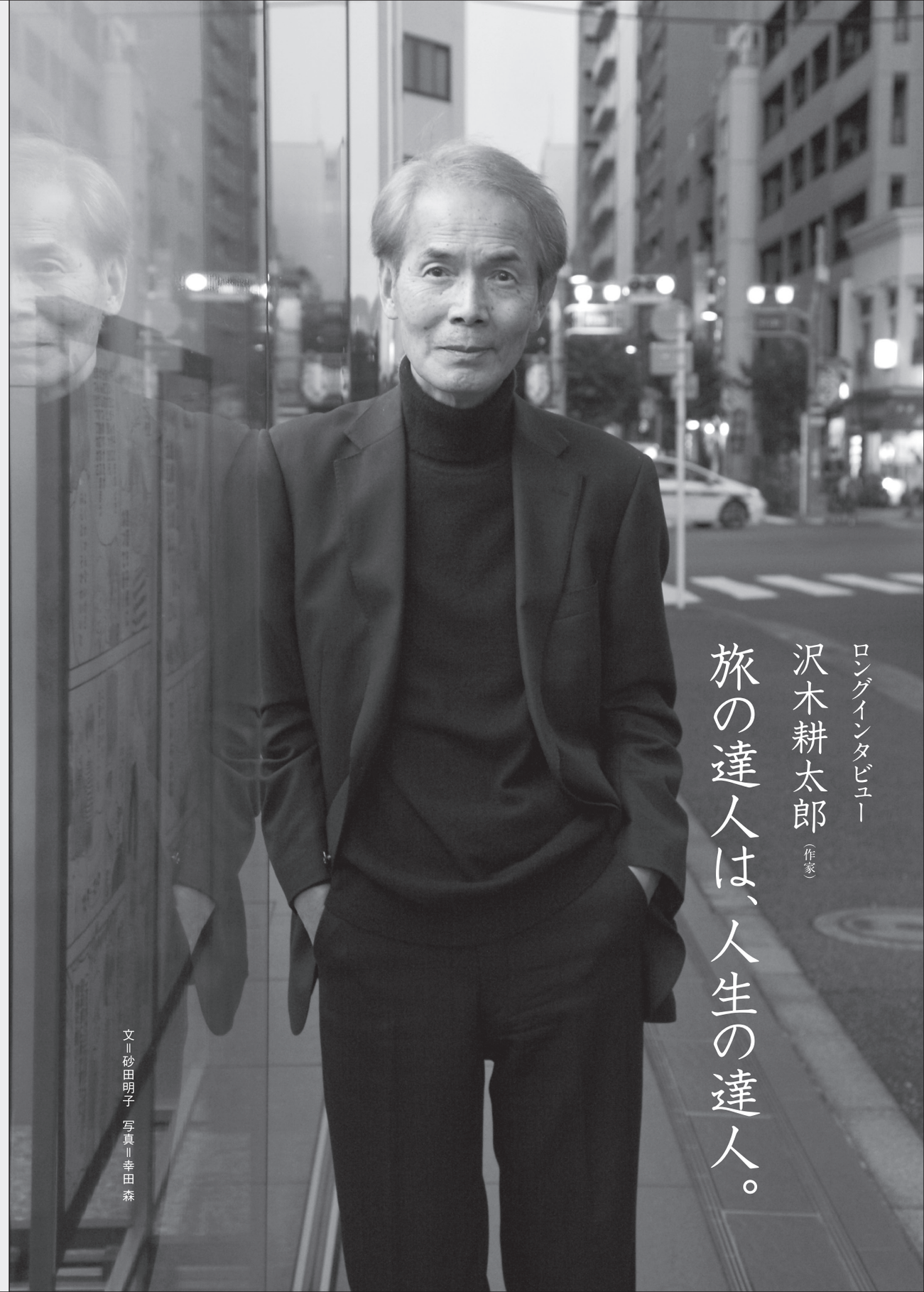

ロングインタビュー

# 沢木耕太郎（作家）

# 旅の達人は、人生の達人。

文＝砂田明子　写真＝幸田森

**九年ぶりとなる大型ノンフィクション『天路の旅人』（新潮社）を上梓した沢木耕太郎。テーマに選んだのは、密偵として中国奥地に潜入し、チベットやヒマラヤを八年間旅した希代の旅人、西川一三だった。**

**生前の西川に会うため盛岡に通い続けてから四半世紀、実際に執筆を始めてから七年の歳月を費やした作品は、多くの若者をユーラシアへの旅に誘った『深夜特急』という旅文学と、『檀』『凍』などの人物評伝を書き継いで辿り着いたライフワークとも呼べる大作となった。五〇〇ページ超の作品を書き終えた作家に訊いた。**

――今から二五年前、沢木さんは初めて西川一三さんに会われました。最初の印象はいかがでしたか。抱かれていた印象やイメージと、異なるところはありましたか？

僕は人と会う前にイメージすることってあまりないんです。わりとフラットに会うので、「こういう人じゃないかと思っていたら、違ってた」なんていう経験はほとんどないんですよ。

西川さんについても、最初に感じたのは「大きいな」くらい。身長が僕と同じ一八〇センチくらいで、しかもガッチリされていた。会ったときは八〇歳手前だったけど、すごく元気そうで、それはほっとしました。

――最初の対面で〈面白い〉〈この人について書いてみたい〉と強く思われ、一年もの間、毎週、西川さんの暮らす盛岡に通うことになります。西川さんのどこに惹かれたのでしょうか？

それはもう単純で、若いときに希有な旅をした人が、本を一冊書いただけで、自身の経験を声高に主張することもなく、いわゆる市井の人として、ごく普通に坦々と生きている。そのことがすごいなと思ったんです。

そうした西川さんのありようは、僕の父のそれとよく似ていました。一合の酒と一冊の本があれば幸せ、そして工員のような仕事をして生きていた親父と似ていた。西川さんは、一日二合だったけれど。

――第二次大戦末期、「密偵」として中国大陸の奥深くに潜入した西川さんは、日本からの「還れ」という命に背いて敗戦後も蒙古人のラマ僧になりすまし、チベットからインドまで足を延ばします。しかし、八年の長旅を終えて日本に還ってきてからは、一転、盛岡で一商店主としての人生を全うしている。元日以外三六四日、九時から五時まで仕事。昼は毎日、カップ麺とコンビニの握り飯。夜は居酒屋で酒を二合飲んで帰宅し、家族と食事を摂る。未知なる土地を求めて旅した若き日と、規則正しく働く日々のコントラストが強烈です。

そうやって市井の人として静かに生きていくことと、二十代から三十代にかけての、平凡な形容詞だけど破天荒な旅とは、傍から見たら大きな落差があるけれど、西川さんにとってはほとんど等価なんだろうという感じがあったんです。市井の人として静かに生きていくことと、希有な旅の経験が、彼のなかではほとんど等価。どちらが優れているとか、どちらが良いというものではなくね。そういう生きようにも、僕はすごく惹かれるものがありました。

――ちなみに西川さんは、沢木さんのことはご存じだったんですか？

全然知らなかった。最後まで知らなかったと思うよ。興味なかったと思う。亡くなった後、奥さんとお嬢さんに、「沢木さんのことを一言も話してくれなかったから、会っていたことに気づかなかった」と言われた。

正直言って、自分の旅について喋ることを、西川さんはあまり好んでなかったと思います。特別な体験だと思っていないし、アピールしようという気もなかった。そこがやっぱり素敵だと思うんだけれど。

でも、僕とお酒を飲む時間は、楽しかったんじゃないかとちょっと思うのね。二人とも手酌

**この続きは本誌でどうぞ！**

LONG INTERVIEW
Sawaki kotaro